

# 「さながら」といふ言葉をめぐる

井上知香

実際のところ「さながら」という言葉を私はこれまで生きてきた中で一度も使ったことがないことに

思い至りました。ところが、不思議と漠然としたイメージをつかむことはできてしまいます。辞書に目を通すと、あながち自分のとらえも遠いとはいえません。しかしながら、説明しようとすると言いよばんでしまいます。そこで、本誌面をお借りして少しずつでも自分で語れる言葉を探索してみたいと思います。何となくわかったような気になる……のでは

なく、いま一度じっくりと「さながら」という言葉と向き合っていきたいと思えます。

## 「さながら」とは

日本国語大辞典（註）においては、「さながら」について以下のように説明がなされています。

【さながら】（副詞）「さ」に助詞「ながら」が付いてできたもの（）

①すでに存する事物、事態が不変の姿であるさまを表わす。そのまま。もとの通り。

②すでに存する事物、事態が量的に不変であるさまを表わす。そのまま全部。全部そっくり。

③文脈上または心理的に問題になっている事物、事態を、既知の事物、事態になぞらえるときの、同一感を表わす。まるで。あたかも。

倉橋が使用している「さながら」の意味は、ここでは①ととらえるのが妥当ではないかと思われれます。もしくは②の意味とも近いのかもしれませんが。さらに、副詞「さ」には「前に示されていることを受けて、その事態を示す語。そう。そのように」という意味があることを確認すると、倉橋の述べた「生活をさながら」にしておくと、すでに営まれている子どもの生活をそのままにしておくとおくと意にとることができません。

### 浮かび上がる二つの世界

このように「さながら」の意味をいま一度立ち止まって考えてみると、あるがままの子どもの姿をとらえることであったり、子どもの思いを受け止めることであったりといった「いま」のことにのみ向くのではなく、そこにはさらに広範な次元を内包するような時間の移ろいを感じとることができず。ある子どもの生活が営まれていた世界と、その世界を意識して保持しなくてはならない世界……。少々大げさな表現になってしましますが、そこには「幼稚園」というものを日本の社会に組み入れた瞬間を起点として生じた、前後の異なった世界の存在が浮かび上がってくるように感じられるのです。

倉橋惣三の後にお茶の水女子大学附属幼稚園において園長を務めた坂元彦太郎は、その著「倉橋惣三・その人と思想」において、倉橋の主著それぞれ

を改めて読み解く中で、彼の生涯とその時代や思想の展開について整理しています。その中で倉橋が講演で語ったある言葉を紹介しています。それは、前述した異なった世界の存在の立ち現れを想起させるようなものでした。

「人間の生活は、原始時代のようにかんたんではなくなり、いまは、最小の努力で最大の効果をあげるために、実生活から教育が分離されることになった。そこで、教育を行う専門家が、教育を行う特別の場所で、全力をあげて生活から分離した教育をいとなむことになった。」<sup>註2</sup>

### 子どもの生活

当時「幼稚園」というものの存在、その内容が人々の間において、まして子どもたちにとってはなおさら当たり前のものではなく、特殊性を帯びるものであったことが推察されます。

すなわち、倉橋が子どもと向き合って生きた時代においては、(それまでの子どもたちの生活がいかなるものであったのかについて、ここでは触れることができません)ある生活をいとなんでいた子どもたちにとって「幼稚園」で生活するということは、子どもたちのそれまでの日常を崩すものであり得たのかもしれない。

だからこそ、多分に大人の恣意性が含まれた「幼稚園」設立の背景とその内容の実際を前にして、倉橋は「幼児の生活を真実にさせ」<sup>註3</sup>ることに主眼を置き、「生活を生活で生活へ」と唱え、子どもの生活本位を強調したのではないでしょうか。上段で引用した言葉の続きで倉橋は、「幼稚園で、人や場所からは、実生活から分離しても、教育の方法を実生活から分離する必要はない」とも述べています。<sup>註4</sup>

現代においては、当たり前のように浸透している「幼稚園」が、その設立当初においてはそうではな

かった。いま、子どもの姿を中心に据えた保育のいとなみをとらえようとする時、そもそも「幼稚園」というものが、人々（子どもたち）の間において当たり前前に存在するものではなかったという成立背景を認識する必要性を感じます。

### さながらの生活

このように「さながら」という言葉をめぐらる中で、幼稚園において観察をしている時に出会った一人の子どもの姿がふいに思い起こされました。

その時、座りながら子どもたちや先生の様子を見



ていた私の耳に、かすかなメロディが聞こえてきました。音を最初に耳でとらえた私は「ああ、鼻唄だ」と感じました。そして辺りを見渡すとすぐ近くに、朗らかに一人で遊んでいる子どもが目飛び込んできたのでした。誰に聞かせるでもなく自然に出てきたのであろうメロディを聞いて、私はなぜだかわからないけれども、心地良さを感じると共に、とてもほっとした気持ちになったことを覚えています。とても印象深く。

（お茶の水女子大学大学院博士課程）

### 注

- 1 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典 編集部編『日本国語大辞典 第二版 第六巻』小学館 二〇〇一年
- 2 倉橋惣三文庫9『倉橋惣三・その人と思想』坂元彦太郎著 フレーベル館 二〇〇八年 p.50
- 3 倉橋惣三文庫1『幼稚園真諦』フレーベル館 二〇〇八年 p.22
- 4 2に同じ p.51